慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パルメニデスの哲學に就いて
Sub Title	
Author	青木, 巖(Aoki, Iwao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1931
Jtitle	哲學 No.8 (1931. 8) ,p.169- 187
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000008-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パルメニデスの哲學に就いて

青木巖

吾人は、パルメニデスの哲學思想を、ツェラーの如く、das Seiende, Physik, Kosmologie, Anthropologieの四部に分つて考察する事が出來るであらう。然し、私が今此處に論述せんとするのは、彼の哲學思想の核心をなせる以上の四部の第一の問題に就てである。パルメニデスの所謂『存在するもの』τὸ ἐόν（これを單に存在とか實有 das Sein, being, l'être 等と譯してゐる人があるが、誤解を避くる爲に、これはツェラーの如く存在するものと譯すべきである。）の本質に關する問題に就て、併せては彼の哲學の全體としての傾向及び歴史的地位に就てである。唯々此問題が今日迄餘りにも多くの卓れたる哲學史家によつて餘りにも多く檢討されたる事實は、私の以下の極めて貧しき小論の存在價値に對する危懼の念を痛切に引起すのである。

パルメニデスの『存在するもの』に就ての思索の根本命題は、『存在するものは有

り』との規定と、『思惟され得るものと存在するものとは一致する』との命題の二つであつたと考へ得られる。ディールスの配列に依る第四及び第五の斷片は次の如くに語つてゐる。『いざ來れ、われ汝に告ぐ。――汝吾が言葉に耳を傾けて心せよ。――如何なる道のみが研究の道として考へられ得るかを。第一の道は、有り而して有らざるを得ず、との道にして、こは確信の道なり。そは眞理之に伴へばなり。然るに、第二の道は、有らず且つ有らざるが必然なり、この道にして、こは汝に告ぐ、全く知るを得ず――蓋し不可能なれば――又、言ふを得ざればなり。同じもの(のみ)が考へられ得ると共に又存在し得ればなり。』

εἰ δ' ἄγ' ἐγὼν ἐρέω, κόμισαι δὲ σὺ μῦθον ἀκούσας, αἵτερ ὁδοὶ μοῦναι διζήσιος εἰσι νοῆσαι·
ἡ μὲν ὅπως ἔστιν τε καὶ ὡς οὐκ ἔστι μὴ εἶναι, Πειθοῦς ἐστι κέλευθος Ἀληθείῃ γὰρ ὀπηδεῖ·
ἡ δ' ὡς οὐκ ἔστιν τε καὶ ὡς χρεών ἐστι μὴ εἶναι, τὴν δή τοι φράζω παναπευθέα ἔμμεν ἀταρπόν.
οὔτε γὰρ ἂν γνοίης τό γε μὴ ἐὸν οὐ γὰρ ἀνυστόν οὔτε φράσαις.
τὸ γὰρ αὐτὸ νοεῖν ἐστίν τε καὶ εἶναι.

パルメニデスがその詩に於て、『存在するものは有り』との根本命題を主張せん

とする際に、單に ἐστί を以てせる場合と、明白に τὸ ἐόν 又は ἐόν を主語として使用せる場合と二つある。以上の斷片の第三行及び第五行は見らるるが如くこの第一の場合であるが、ディールスはその譯に於て das Seinde を主語として補つてゐる。これは前後の關係より見るも、勿論許さるべき事であるが、唯、私は以下に展開せんとする問題への影響を恐れるが故に斯く譯さなかつたのである。次に、以上の最後の行となつてゐる第五斷片は、屢々『思惟と存在は同一なり』と譯されてゐる有名なる句であるが、一つには斯かる飜譯の持つ新カント派的色彩を避け、又一つには文法上、ἐστὶν を以て νοεῖν καὶ εἶναι にかかれるものとするツェラーの解釋に從つたのである。(二)

以上の斷片に見ゆるが如く、パルメニデスの問題は、ミレトス學派或はピュタゴラス學派のそれと異り、存在するものそのものの規定であつた。而して、彼はその所謂『存在するもの』を存在性そのものによつて、從つて、『存在せざるもの』の非存在性によつて、規定したのであつた。存在するものは存在する事によつて、從つて、『存在せざるもの』でない事によつて、規定せられるのである。而して、これは思惟必然

の法則によるのであつて、自然の理であり、確信であると云ふ。之に反し、『存在するもの』が存在せずとは、一面に於て、その必然の法則に悖るのみならず、全然無意義の主張である。何故かならば、凡そ吾人の思惟の對象たるものは、その限りに於て、存在するのであつて、又、存在するものは、その限りに於て、吾人の思惟の對象となり得るのである。『同じもののみが考へられ得ると共に存在し得る』と云ふ、屢々マールブルヒ學派の觀念論者によつて利用せられるこの有名なる第五斷片の意味は、これ以上のものでもなければこれ以外のものでもない。

パルメニデスに於ける思惟の可能性と存在性との合一は、決して觀念論的意義を有するものではないが、同時に又、例へば(三)ロバンの指摘せるが如き實在論的意味に解されてもならないと思ふ。パルメニデスは唯々思惟は存在の思惟であり、存在は思惟の存在であると述べてゐるに過ぎない。(四)第八斷片にも『思惟する事と思惟存在の目標たるものとは同一なり。』と云つてゐる。

ταὐτὸν δ' ἐστὶ νοεῖν τε καὶ οὕνεκέν ἐστι νόημα

全く存在せざるものは、吾人の思惟の對象たり得ず、又、吾人の言表し得ざるもの

である。全然『存在せざるもの』を知る事は出來ないのである。存在せざるものも、思惟の對象たる限りに於て、『存在するもの』なるが故に、絶對的非存在者は全然吾人の考へ得ざる述ぶる能はざるものでなければならない。パルメニデスは、斯くその『存在するもの』を規定するに當つて、純粋なる存在性を被思惟性によつて肯定すると共に、純粋なる非存在性を規定する事によつて『存在するもの』の純粋なる存在性を求めたのであつた。吾人の思惟し得る『存在するもの』は唯々純粋なる存在性としてであつて、『それは有り』とより規定し得ないものである。此處に彼の哲學の一元論的と言はるる根據があると云へる。

このパルメニデスの『存在するものは有り、存在せざるものは有らず』との根本命題は、一見タウトローギッシュにして何の意味も内容も無き規定かの如くに思はれるのであるが、實にこの命題の中にこそ歴史的意義と意味深き内容が盛られてゐると想ふ。彼は此命題に依つて、後に述ぶるが如き意味に於て、哲學史上に於ける自らの確固不拔なる地位を獲得したると共に、一面に於ては、その先驅者達の思索に對する自らの獨自の立場を旗幟鮮明にしたのである。特に、彼と殆んど時代

を同うせしかのエプェソスの『暗の人』ὁ σκοτεινός ヘラクレイトスへの抗辯となつてゐる事は歴史的常識となつてゐる。第六斷片に言ふ。(五)『併し、更に全く知るなき人間ども――兩頭動物 ὀκρανοι――の彷徨へるその道より(吾汝を卻く)。蓋し、無術策彼等の胸中の思想を指導すればなり。斯くて、彼等は恰も聾者盲者の如く、唯々啞然として運ばるるのみ。判斷力無き群集。彼等には存在する事と存在せざる事が同一にして然も同一ならずと考へられ、萬物の道は相反せる道なりとせらる。』と。曾つてツェラーの如きは、以上の斷片がヘラクレイトス一派への抗辯ならずと論じたのであるが、今日に於てはディールスやバーネット等の諸氏の權威ある論證もあつて、これは問題とならないと云ふべきである。實にパルメニデスは『存在するものは有り』と規定する事によつて、(七)哲學を自然哲學の問題よりオントロギー及びロギークの問題に轉向せしめ、以てその先驅者達の思索に對する彼獨自の地位を確立したと言ふべきである。人は、ヘーゲルがパルメニデスを以て、本格的なる哲學的思惟の第一人者としたる事を銘記すべきである。

斯く、存在するものは有り、存在せざるものは絶對的に許されざるが故に、パルメ

ニデスにとりて、結局『存在するもの』のみと云ふ事になるであらう。『存在するもの』のみ有るが故に、『存在するもの』は、彼にありて、唯一不可分、不變不動、無生無死、等と規定されるに至つた次第である。彼はこれを『存在するもの』の特質 σημεῖα と稱して、その第八斷片にこれを次の如く詳論してゐる。

『斯(八)くて、尙ほ殘れるは有りと云ふ唯一の道の物語のみ。而して、此途には極めて多くの特質あり。即ち、存在するものは不生にして不滅なり。(九) そは完結、不動且つ無終なればなり。今、直ちに、全體者とし、一者とし、連綿たるものとして存在するが故に、曾つて在りし事なく、又特に有らんとする事なし。蓋し、汝そのものに如何なる根源を求めんとするか。如何にして、又、何處より生成したる(と言ふ)か。……余は存在せざるものより、と汝の云ふを又考ふるを許さず。有らずとは言ふも考ふる事も得ざればなり。そが無より出發したりとせんか、何の必要ありて、先にではなくして、寧ろ後に發生したるか。斯く、必然的に存在すべきか、或は全的に存在すべからざるかの何れかとなる。更に、確信の力も、存在せざるものよりして、そのもの以外の何物かの發生するを斷じて許さざるべし。此故に、正義は、生成死滅なす

事をその足掛より放たずして固持するなり。之を要するに、判斷は此點に在り。即ち有るか有らざるか。斯くて、一道を考へ得ざる言ひ得ざるものとして撰くと、――そは眞の道ならざれば――他道を有る道眞の道なりと、判斷さるるなり。こは當然なれば。如何にして存在するものが特に有らんとするか。又如何にして曾つて有りたるや。蓋し、曾つて有りたりとせばそは有らず。將に有らんとするもそは有らず。斯く、生成は消えて失く、死滅も亦耳にする能はず。

更に、それは全く同一なるが故に、分割し得るものに非ず。此處には云はゞより以上に、其處には、云はゞ、より劣りて、と言ふが如き事もなし。こは、そのものの連綿性を妨ぐべければ。實に全く存在するものに充てるなり。此故に、そは全く連綿たり。存在するものは存在するものと相接觸するが故なり。

然るに、それは偉大なる鎖の限界内にて不動、無始、無終なり。生成も死滅も遙かの遠方に斥けられ、又、眞の確信これらを却けたればなり。同一なるものの中に、同一なるものとして止まり、それ自體に於て留まる。斯くして、それは其處に固定して止まる。そは、力强き必然これを周圍より封鎖せる限界の鎖の中に保持するに

よる。此故に、存在するものは無極限なる事を許されず。蓋し、缺乏する處なければなり。然るに、無極限ならば全てのものを求めて罷まざるべし。……誠に存在するもの以外のものはなく、又將來にもなからん。運命これを全體者として不動者として止るべく縛りたるが故に。……然るに、極限あるが故に、中心より凡ゆる方向に於て等しき圓滿なる球體に比すべく、凡ゆる方面に於て終結せるものなり。……』

『存在するもの』に就てパルメニデス自らの語れる處は殆んど以上で盡きてゐるのであるが、偖て、その『存在するもの』の本質に就きて、從つて、パルメニデス哲學の全體としての傾向に就ては、區々たる解釋が行はれてゐる。殊に、その『存在するもの』を純自然科學的に見做し、以てパルメニデスを(十)Father of materialism となす說が、現代に於て比較的有力であると言へる。ディールス、ツェラー、ヴィンデルバント、ボイムカー、ユーバヴェッヒ・プレヘター等の諸大家も斯かる見方を、全的にではないとしても、支持してゐると言へる。就中バーネットは(十一)『今日の物理學の教科書に見ゆる物質こそは正にパルメニデスのト・エオンである』と云ひ、(十二) There can be no real doubt

that this is whal we call body. It is certainly regardeel as spatially extended, ... All materialism depends on his view of reality. と迄極言してゐる。

今斯かる自然科學的解釋の根據を見るに、それはパルメニデスが『存在するもの』を『一個の空間を充せる空間的に有限なる塊』と見たと云ふ點に置かれてゐると云へる。(十三) ボイムカーの次の言葉も之を裏書してゐる。(十四) Er bezeichnet das Seiende als eine überall zusammenhangende, gleichartige masse, die nicht an einem Punkte mehr sein enthal to als an einem andern, von der vielmehr alles angefüllt sei, ja er spricht ihm sogar ausdrücklich Kugelgestalt zu..... Ebenso erscheint die Einheit des Seienden an der einzigen Stelle, wo sie von Parmenides ausdrüchlich erwähnt wird, in der Form eines räumlichen Continuums.

私はかのスロニムスキーの如く、パルメニデスを以て、(十五) Urvater des Idealismus と見做すが如き解釋には贊意を表する事は出來ないが、然し、パルメニデスの『存在するもの』を以て物質的なる實體と見るが如き說には寧ろ反對せんとする者である。

パルメニデスが『存在するもの』を有りと規定する事によつて得たる處のものが何であるかと言へば、それは純粹なる存在概念そのものであつた。彼の用ひた

るト・エオンなる言葉が具體的直觀的なる匂を有するとし、又、ト・エイナイなる言葉がパルメニデス時代に尙ほ現れてゐないとしても、彼は、『存在するものは有り』と規定する事に依つて、純粹なる存在概念に到達し、哲學問題の中心を存在の論理學に移したと云へないであらうか。彼自らがその第三斷片に述べてゐる樣に、彼の思索の出發點となり終局點となつてゐるものは、『一般的なるもの』ξυνόν である。全ての思想總ての研究の最も一般的なる對象は存在であるであらう。パルメニデスは此點に注目せし第一人者であり、彼の『存在するもの』は實にこの一般的なる存在概念なのである。

更に、此事は、方法論上より彼の態度を觀て肯定さるべき事ではなからうか。方法論上彼が徹底的なる理性論者に屬する事は、彼のト・エオンの解釋の如何に拘らず、萬人の認めなければならぬ處であらう。尤も『ミスティクの精神より自然哲學の起源』を說明し盡さんとし、エレアティスムスも感情を以てその唯一の根本原理としたのである、と斷定せしカール・ヨエルの如きはその例外とすべきではあるが。ヘラクレイトスとパルメニデスの思想的對立は、或意味に於て考へ得られる事であ

るが、方法的に見て、この兩者は一致してゐると一般に言はれてゐる。即ち、何れも理性論者と云ふ點に於て一致してゐると言ふのである。ホフマンも[十七]『言葉と原始論理』と題する興味ある研究に於て、λόγος と σῆμα の對比よりして此點を明かにしてゐる。併し、私の見る處によれば、パルメニデスはヘラクレイトスよりも尙一歩進んで徹底的なる理性論者であつたと想はれる。即ち、ヘラクレイトスは、尙ほ世界存在の原質として火を認めたのである。其點に於ては、彼はミレトス學派と何等異る處がないと云ふべきである。換言すれば、彼も亦ミレトス學派と同じく類推推論の方法に據つてゐると見られ得るのである。而して、これらの類推は常に一個の若くは數個の自然的事實を前提とし根據としてゐるのである。故に、此點に於て、パルメニデスはヘラクレイトスよりも遙かに徹底せる理性論者であつたと云へないであらうか。又、一面に於て、其處にこそパルメニデスの有つ歷史的重要なる地位が確立されてゐると見られないであらうか。[十八]『斷じて經驗に富める習慣が、汝の見えざる眼、汝の響ける耳、汝の舌を驅りて、此道に支配せしむる事なからしめよ。否、理性を以て、吾が述ぶる數多くの論爭を經たる證明を判斷せよ。』とは、

パルメニデスの詩の序文の結辭となつてゐるのである。パルメニデスの『存在するもの』は感覺的なるものではなく、飽迄純粹概念として論理的思惟によつてのみ、把握さるべきなのである。『存在するものは有り』とは決して感覺知覺ではないであらう。又、彼が第七斷片に言へるが如く、『存在せざるものが有り、とは決して論證され得ない事であらう。』『存在するものは有り』とはそれ自身論理的存在概念の規定であつて、知覺的なる『存在物』のタウトローギッシュな規定ではない。想ふに、パルメニデスに於て『存在するもの』と『有り』とを二斷して見る事が誤解の根元なのではあるまいか。恐らく、此故にパルメニデスも屢々ἐστὶ ἔστι と云はずして端的にἔστιと述べてゐるのではあるまいか。先に述べたるが如く、彼の有名なる『同じもののみが考へられ得ると共に在り得る』との命題も決して新カント派の或人達の見る様な觀念論的意味を有つてゐるのではないが、パルメニデスに於ける純粹なる存在概念の確立を意味してゐるに過ぎない。

パルメニデスは『存在するものは有り』なる命題によつて、純粹なる存在概念を把捉したるが故に、『存在するもの』より、空間性時間性を凡て否定したのである。

『存在するもの』は不生不死、無始無終、唯一不可分、不變不動とされたのである。純粹なる存在性には、存在それ自體として時間的空間的廣がりは認められず、それは唯々自己同一的な全體者として考へられるのである。人は彼の『存在するもの』が、第八斷片二十二行以下に於て、連續不可分にして充實せる全一體と說かれてゐるが故に、こは概念にあらずして、物體を意味してゐると考へてゐるが、私には寧ろ連續不可分にして充實せる全一體が如何にして物體性と一致し得るか不可解である。斯かる『特質』は純粹なる存在性として始めて認め得る特質ではあるまいか。この二十二行以下も、一面より見れば、パルメニデスの『存在するものは有り、存在せざるものは有らず、從つて存在するもののみ』との根本命題を裏書してゐるに過ぎないと解されないであらうか。唯々『存在せざるもの』は許されざるが故と不可分であり、不變不動であり、充實してゐると言つてゐるに過ぎない。

次に、然らば、何故パルメニデスは『存在するもの』を極限あるものとし、又『圓滿なる球體』に比すべきものとしたのであるか。世の多くの自然科學的解釋者は、此處にその第二の論據を置いてゐる樣である。卽ち、彼の『存在するもの』は、空間的に

有限なるが故に、特にそれが球體なりと云はれてゐるが故に、こは物體的以外の何物でもないと言ふのである。併し、空間的に有限なるものが何故不可分なのであるか。又、何故、唯一なのであるか。既に、先に不可分性によつて空間性が除去されてゐるのであるから、この第八斷片の四十二行以下は、以上の如く解すべきに非ずして、純粋概念としての存在性そのものより理解さるべきなのである。私は、パルメニデスの解釋に於てベルグソンの所謂『空間的飜譯』が余りに行はれてゐる點に危險が存するのではないかと考へてゐる。

以上の斷片そのものより見ても明白なるが如く、『存在するもの』が有限なりと云ふのは、決して空間的意味に於てではなくして、存在せざるものを絶對的に排除したる(十九)"In-sich-Geschlossenheit des Seins, seine Identität und sein widerspruchloses An-und-für-sich-Sein" を意味してゐるに外ならない。換言すれば、純粋なる存在性としての『存在するもの』の Totalität を指してゐるに外ならない。『存在するもの』が無極限ならば無内容となり、パルメニデスの所謂『必要としないものがないであらう』 πάντῃ ὀνόματα と云ふ結果になる。從つて、それは圓滿なる球體に比較されてゐるのである。

幾多の史家が斷片中に明言されてゐる εὐκύκλου なる言葉を何故無視して、パルメニデスの『存在するものは球體なり』と斷定してゐるか、私はその理由を發見するに苦む者である。これは文獻の明示せるが如く、單なる比喩(二十)と見るが至當である。更に又、これを球體なりと斷定すれば、既にナトルプ(廿一)が論じたるが如く、次の如く問はざるを得ない。Ist das Sein Kugelförmig, so ist es ist notwendig begrenzt, und zwar im Raume; begrenzt im Raume aber kann es nicht sein, denn woran sollte es grenzen? An ein Anderes? Aber es gibt ja kein Anderes? An das Nichts? Aber es gibt ja kein Nichts. Oder soll man sich etwas wie eine unbegrenzte Kugel vorstellen?

私は、以上の如く、パルメニデスが『存在するもの』の所謂セーマタを列記せる第八斷片を一貫せる根本原理は、第四及び第五の斷片に現れたる命題であつて、從つて、前者が彼の『存在するもの』の本質を規定する上に重要なのではなくして、寧ろパルメニデス哲學の本質及び史的意義を後者に於てのみ發見せんとする者である。彼の存在論は『一(廿二)個の純粹なる、而して神學的混入より免れたるロギークである。純粹に概念的なる、原理的に全ての經驗及び直觀より抽象されたる思惟の方

法と云ふ意味のロギークである。』

最後に一言して置くが、パルメニデスの『存在するもの』の自然科學的見方を採る人は、住々アリストテレスにその典據を求めるのであるが、アリストテレスが秀れたる古代に於ける哲學史家なりし事に疑はないとして、彼の史的敍述が往々杜選なりし事も忘却してはならない。殊に、此場合もパルメニデスの『存在するもの』に就て二樣の見解を許すが如き言辭を殘してゐるのである。即ち、一方に於ては、パルメニデスが『存在するもの(廿三)は感覺的なるもののみであると考へた。』τὰ ὄντα ὑπέλαβον εἶναι τὰ αἰσθητά μόνον. と述べてゐると共に、他方に於ては、パルメニデスは『論理的に κατὰ τὸν λόγον 一者なるものを固執してゐたと想はれる』と云ひ、又、セクストス・エムピリコスの傳ふる處によつても、アリストテレスは、パルメニデスを『非自然哲學的』(廿五) ἀφυσικός と稱したと云はれてゐる。寧ろ、私の見解の典據を求むるならば、私はこれをプラトンに求める。彼が極めて信賴すべき歷史家なりしが故に。『自分(廿六)にとつて、パルメニデスは、ホメロスの言葉で云へば尊むべく且つ恐るべき人物であると思はれる。自分は年若くして既に年老ひたりしかの人物と接し

たが彼は全く卓拔なる言はゞ精神の深さと云ふものを有つてゐる樣に思はれた。』

とプラトンをして述懷せしめたる根據は果して何處にあつたのであらうか。

(註一) H. Diels, Die Fragmente der Vorsokratiker, Band1, 1922, S, 152.

(註二) E. Zeller, Die Philos. d. Griechen, Teill, Hälfte 1, 1923, S. 687. Anm.

(註三) L. Robin, La Pensée grecque, 1923, p. 103 ff.

(註四) H. Diels, op. cit., S. 157.

(註五) Ibid. S. 153.

(註六) E. Zeller, op. cit., Teil 1, Hälfte 2, S. 925 ff.

(註七) cf. E. Cassirer, Die Philos. d. Griechen, in Dessoirs Lehrbuch, 1925. S. 39.

(註八) H. Diels, op. cit., S. 154 ff.

(註九) ペーキトンと共にシミアリキオスよりもアルタルコスに從ひて (adv. col. 1114c) γὰρ οὐλο-μελές と讀みたり。

(註十) J. Burnet, Early greek philos., 1920, p. 182.

(註十一) 〃 , Grek philos., Part 1, 1924, p. 68.

(註十二) 〃 , Early. g. ph. p. 178 ff.

(註十三) Ueberweg-Praechters, Die philos. d. Altertums, 1926. S. 84.

(註十四) C. Baeumker, Das Problem der Materie in der griech. Philos., 1899, S. 56.

(註十五) H. Slonimsky, Heraklit und Parmenides, 1912, S. 47.

(註十六) K. Joël, Der Ursprung der Naturphilos. aus dem Geiste der Mystik, 1926, S. 82 ff.

(註十七) E. Hoffmann, Die Sprache und die archaische Logik, 1925, S. 14 ff.

(註十八) Fragment, Vorwort Zeile 34 ff.

(註十九) B. Bauch, Das Substanzproblem in der griech. Philos., 1910, S. 46.

(註二十) cf. W. Kinkel, Gesch. d. Philos., Teil 1, 1906. S. 147.

(註廿一) P. Natorp, Aristoteles und die Eleaten, Philos. Monatshefte XXVI. S. 11.

(註廿二) K. Reinhardt, Parmenides und die Gesch. d. griech. Philos. 1916, S. 250

(註廿三) Metaph. 1010 a 3; cf. de caelo 298 b 21.

(註廿四) Metaph. 986 b 18.

(註廿五) Sex. adv. Math., X 46.

(註廿六) Theaet. 183 e.